博士学位論文

（要約）

ジャン・ヴァールの思想における「実存」の「超越」―経験に下降する形而上学―

The “Transcendence” of “Existence” in Jean Wahl’s Thought:

Descent of Metaphysics into Experience

聖心女子大学大学院

文学研究科・人文学専攻

押見まり

序論

ジャン・ヴァール（Jean André Wahl, 1888-1974）は、20 世紀のフランス思想界で活躍した哲学者である。ヴァールは大学での教育活動の外でも、多くの思想家や文化人と交流し、高く評価されていた。しかし、ヴァールはしばしば「哲学史家」や「優れた教育者」として扱われ、その固有の思想については近年までほとんど論じられてこなかった。そこで本論文では、第二次世界大戦後のヴァール思想における「実存〔existence〕」と「超越〔transcendance〕」の概念を解明すべく、二つの超越概念「超昇／超降〔transascendance/ transdescendance〕」に着目し、「超昇／超降」を区別したヴァールの思想的意図、また「超昇／超降」の二概念のヴァール思想における役割と展開を考察する。考察に際しては、『人間の実存と超越（*Existence humaine et transcendance*, 1944）』をはじめとする 1940 年代以降の著作を参照する。

本論文は六章に渡って展開される。第一章から第三章にかけては、「実存」と「超越」の二観念およびそれらのかかわりについて検討し、「超昇／超降」概念の背景にあるヴァールの思想的意図の解明を試みる。特に第三章は、それまでの思想を引き受け、ヴァール自身の姿勢が明らかになる点で、本論文の中核をなす章である。続く第四章と第五章では、ヴァールの芸術観と対比しつつ、ヴァールが構想する人間的実在へ向かう形而上学のあり方を考察する。最後に第六章では、ヴァールからの影響を明言するレヴィナス思想とのかかわり、そしてヴァールが生きた時代に隆盛した「実存主義」とのかかわりの検討を通して、ヴァール思想の射程と可能性を明確にする。第四章から第六章の議論は、哲学者としてのヴァール像の提示に貢献しうるだろう。本論文では、

以上のような議論を通して、ヴァール固有の思想を精確に描きとることを目指したい。

第一章　二つの「超越」の背景――ヴァールと「実存の哲学」

第一章では、「超昇／超降」の二概念が提示される背景について検討する。第 1 節では、本格的な議論に先立ち、本論文の主たる対象である『人間の実存と超越』がいかなる著作であるか確認した。『人間の実存と超越』に収められた、「超昇／超降」の登場する最初期の論考は「実存の哲学〔philosophie de l'existence〕」における主体性と超越の関係を主題とする。それゆえ、二つの超越概念の背景には「実存の哲学」があると考えられる。

そこで第 2 節では、後年の著作も用いつつ、ヴァールが「実存の哲学」をいかなる思想と捉えたのか精査した。検討に際し、本論文では、特にキルケゴールとハイデガーについてのヴァールの記述を手がかりとした。ヴァールは、キルケゴールの思想を、個的な実存に超越を見出す点で、超越的な彼方に実在〔réalité〕を求める伝統的哲学に対立する思想と捉える。またヴァールは、ハイデガーが実存を「世界内存在」と規定したことを高く評価する。しかしそれらの思想における実存は、神との関係や世界への超越といった外部とのかかわりに基礎づけられる。かくて、実存を探究する内在の哲学としての「実存の哲学」は、超越の哲学に回帰してしまうのだ。

第二章　ヴァール思想における「実存」と「超越」

第二章では、『人間の実存と超越』の第一章と第二章の記述から、同書における「実存」と「超越」の観念について検討する。まず第 1 節では、「実存」の観念について考察した。ヴァールによると、実存の観念のうちには二律背反が存するがゆえに、実存の本質は、思考や意識によって規定できないものである。それゆえ規定不能な実存の観念に代わり、実存はその内実をなす感情によって描かれる。しかし感情が生じるには、他とのかかわりと、その経験の核となる自我の両方が必要だ。この点に、「私の実存」と「他者」とが基礎づけあう論理循環的構図が見出される。さらに、悔恨や希望といった過去や未来の感情から出発しても、今ここにある実存は捉えられない。したがって、ヴァールにとっての実存は、知性によっては把捉されえないものだと言える。

続いて第 2 節では、「超越」の観念について考察を行った。ヴァールによると、超越の観念には「運動」と「終着」の二つの意味が含まれる。運動としての超越は努力であるが、この努力は終着によって消失することから、超越を定義する「運動」と「終着」とは二律背反の関係にある。

かくて超越も実存と同様に、感情においてのみ到達されるのだ。ところで感情は伝統的に、意識よりも下位にある内在的なものと捉えられてきた。それゆえヴァールは、超越と内在もまた、背反しつつ基礎づけあうと考える。このことから、超越することで内在する「超昇」と、内在することで超越する「超降」の対概念が提示される。内在への超越である「超降」は、思考の出発点たる感情としての「信」へと至ると考えられる。しかし、「信」は超越を肯定するがゆえに、内在へ向かう超越運動は再び超越的なものへと向かうことになる。このように、ヴァールにとっての「実存」と「超越」は、それぞれ背反する二項によって規定されるがゆえに、思考、意識、理性によっては把捉されえないものであり、超越と内在の間で循環を描くのだ。

第三章　実存と超越のかかわり――主体性と超越の二律背反

第三章では、『人間の実存と超越』所収の論考「主体性と超越（«Subjectivité et transcendance », 1937）」から、「実存」と「超越」とのかかわりについて考察する。第 1 節および第 2 節では、キルケゴールの思想と、ハイデガー・ヤスパースの思想についてヴァールが展開する議論を確認した。これら三者の思想のうちに、ヴァールは、主体性と超越との相互的な関係を見て取る。この関係においては、主体性すなわち実存が超越的な他に基礎づけられる一方で、この超越的な他も、主体性とのかかわりのうちでのみ顕在化する。

第 3 節では、キルケゴール、ハイデガー、ヤスパースの思想に対するヴァールの批判を検討し、ヴァールが構想する哲学の姿を考察した。ヴァールは、これら三者の思想には、実存が形而上的な実在に基礎づけられる点で、神学的要素が残っていると論難する。ヴァールは、実存そのものの逆説のうちに実在を求めるべきだと主張し、「超降」の概念を提示しつつ、形而の領域のなかで人間を基礎づける原初的な他を問おうとする。だが、実存それ自体の逆説に目を向ける哲学は、実存を問う「実存論的〔existential〕哲学」ではなく、個々人がいかに実存するかを問う「実存的〔existentiel〕哲学」の様相を呈する。それゆえヴァールは、自らが目指す哲学が「実存の哲学」よりもむしろ、ランボーやファン・ゴッホ、ニーチェなどの実存者の実存に存すると述べる。ヴァールのかかる姿勢こそ、ヴァールの著述に芸術家への言及が頻出する所以であろう。

第四章　実存者における哲学の源泉――ヴァール思想と芸術

第四章では、実存者としての芸術家、あるいは芸術の営みのうちに、ヴァールが見出した主体

性と超越の緊張について、そして芸術と哲学との関係について考察する。

第 1 節では、『形而上的経験（*L'Expérience métaphysique*, 1965）』におけるファン・ゴッホへの記述と、『人間の実存と超越』および『詩、思考、知覚（*Poésie, pensée, perception*, 1948）』所収の詩についての論考を取りあげた。ヴァールは絵画や詩といった芸術の営みのうちに、実存の逆説として、様々な二律背反の対立と合一を看取する。とりわけ詩についてヴァールは、形而上学の営みと同様に言葉を用いつつも個的な実存における緊張を表現する点で、形而上学と相補的関係にあるものと捉える。かくて、芸術はヴァールにとって、主体性と超越との緊張の激化による実存の表現行為と言えよう。

第 2 節では、芸術、なかんずく詩と、哲学・形而上学との関係を検討した。ヴァールによれば、形而上学と詩とは、それぞれの営みの出発点と到達点である言い表せない驚きにおいて合一し、相互に基礎づけあう。このように相補的関係にある二つの営みの差異は、その超越運動の方向である。形而上学においては、理性的推論、弁証法によって此方から彼方へ上昇する超越運動が行われるのに対して、芸術においては、形而や非理性的な感情に沈潜することで超越運動が生起する。芸術は、いわば「超降」的な運動によって実在に到達するのだ。だが、形而上学の運動が本来的に上昇するものであり、芸術に基礎づけられるとすれば、内在へ下降する形而上学がいかにして可能なのか検討せねばならない。

第五章　「形而上的経験」へ――形而に回帰する形而上学

第五章では、ヴァールが構想した人間的実在を求める形而上学のあり方を考察する。第 1 節では、『人間の実存と超越』の「序文」を参照し、ヴァールが提示した「超越論的経験論〔empirisme transcendantale〕」について検討した。ヴァールは、実存を基礎づけ、弁証法の出発点と到達点となる実在を問おうとする。そのために提示されるのが、経験が実在的であるための条件を探究する「超越論的経験論」である。超越論的経験論によって最初に目が向けられるのは、意識の手前としての知覚と、彼方としての脱自である。だが、実在と意識とは隔たっているがゆえに、実在の近似は、非意識的な「感情〔sentiment〕」のうちで探究される。かくて、超越的な実在の探究は内在的な実存の探究へ還流するのだ。

第 2 節では、この「超越論的経験論」を、晩年の「形而上的経験〔expérience métaphysique〕」の原型と仮定し、考察を行った。ヴァールは最初、「形而上的経験」の候補として存在、世界、絶対の経験を挙げるが、人間はそれらの経験をもちえないことが明らかになる。それゆえ形而上

的経験は、自らの基礎を基礎づける主体自身の経験に帰結する。形而上的経験とは実存であり、その実存を生きる人間自身なのだ。したがって、「超越論的経験論」によって問われる実在は人間の実存と措定される。だが人間の実存は、神との関係や世界に基礎づけられるものでもあった。かくて実存の条件たる実在を問うことは、結局実存を問うことへ、そして実存を問うことは超越的な実在を問うことへと循環する。しかしヴァールは、循環するこの理論を断ち切ろうとはせず、むしろかかる循環によってこそ実在が現れると主張する。つまり、ヴァールにとっての「実在」、そしてこの実在と基礎づけあう実存は、相対立する二項から垣間見えるだけの「言い表せないもの」なのだ。

第 3 節では、晩年のヴァール思想における「超昇／超降」の観念を検討した。第 2 節までで見たように、実存のうちの実在を見ようとするヴァールの問題意識は、『人間の実存と超越』から『形而上的経験』に至るまで保持されている。他方で、『形而上的経験』において「超昇／超降」は用いられない。しかし「超昇／超降」の語は使われずとも、晩年の思想のうちの「上ー真理／下ー真理」の概念や「ピラミッドとしての形而上学」の表象に、感性的実在が上下対称的に存するという発想が看取されうる。したがって、「超昇／超降」は、ヴァール思想の中核に位置する問題意識の萌芽を象徴する対概念だと言えよう。

第六章　ヴァール思想の射程と展開可能性――レヴィナス思想と「実存主義」から

第六章では、ヴァール思想が内包する哲学的展開の可能性について考察する。第 1 節では、レヴィナスによるヴァール論を取りあげた。レヴィナスによれば、伝統的形而上学は人間を貧者と捉え、人間を外部から規定する本質や存在を希求する。しかしそのような思想は、まったく異なる他者を所有し、また個体的人間を普遍性によって疎外する哲学である。かくてレヴィナスは、伝統的形而上学を全体性の哲学と論難する。他方でヴァール思想については、所有を拒み人間の豊かさを認める思想として高く評価している。この点に、ヴァール思想が内包する展開可能性を看取できよう。というのも、実存のうちの実在に目を向けようとする思想は、人間の豊かさを認める哲学であり、貧者としての人間観に立脚する伝統的形而上学とは対照的と言えるからだ。

ヴァール思想に対するレヴィナスのかかる見解は、『全体性と無限』で提示される形而上学のあり方へ継承されるように思われる。レヴィナスによると、形而上学の原動力たる欲望の伝統的概念は、欠如や貧窮としての欲求に基づく。それゆえ、伝統的形而上学においては、形而上学が目指す他も、かつて同であったものと捉えられてしまう。これに対してレヴィナスは、「全く他

なるものに対する満たされぬ欲望」としての形而上学的欲望を提示する。この欲望は、高きに存する「見えないもの」へと上昇する運動であり、この意味で、レヴィナスは形而上学的運動を「超昇」と表現する。かくて、ヴァールのように人間的実在を認める思想は、「絶対的な他」と「形而上学的欲望」の概念へと結実し、レヴィナス思想のような倫理的哲学の構想へと展開しうるのだ。

第 2 節では、ヴァール思想が「実存主義」や「実存の哲学」として数えられるのか検討した。ヴァールは複数の著作で「実存の哲学」を論じていたこともあり、しばしば「実存主義」に連なる者として紹介されてきた。しかしヴァール自身は、「主義者」の語が一般性を覆ってしまうとして「実存主義者」の呼称を拒んでいた。というのも、本論文で見てきた通り、実存の哲学は伝統的哲学に回帰し、その意味で「正統」な哲学だからだ。さらに本論文では、「実存を強調し、探究する思想」という意味でも、「実存主義者」にヴァールが該当しないと判じた。ヴァールは、内在と超越を合一させ、実在そのものを垣間見るという、極めて広範な問題意識を有するからだ。したがって「実存の哲学」はヴァール思想にとって、内在と超越の弁証法に参与し、それを再生産する哲学の営みの一つであったと考えられよう。

結論

以上の議論から本論文では、ヴァールの思想的意図は、実在を形而上的領域に帰属させてきた伝統的形而上学を問い直し、人間の実存の基礎へと沈潜することで、形而的領域の実在に目を向けることであったと結論づける。そしてこの実在は、人間の実存と基礎づけあうがゆえに、人間の実存もまた実在であり、ここから形而上学の営みが発するのだ。

かかる問題意識の下で提示された「超昇／超降」の概念は、ヴァール思想の枢要にある「此方の実在」という発想を端的に表し、晩年に提示された諸概念の原型としての役割を果たしている。特に「超降」の概念は後に、経験を基礎づける「形而上的経験」の概念として展開していく。そして、実存や経験のうちに実在を認める思想は、全体性の哲学に抗する倫理的哲学としてレヴィナスに継承される。かくて、ジャン・ヴァールの「超越」にまつわる思想は、「実存」の思想と合一することで、「形而における形而上学」とも呼ぶべき新たな形而上学へ展開するのだ。